紹介

トィトマス著「貧乏と人口」

Poverty and Population, by Richard M. Titmuss. 1938, Macmillan. xxviii + 320

副題「現代に於ける社會的浪費に關する實證的研究」

A Factual Study of Contemporary Social Waste.

英國に於て十九世紀の第四四半期以來、出產率の年々減退し來つた事は、心ある英國人の夙に憂へた所であつたが、一九二八年クチンスキーが「出產と死亡の均衡」に於て、婦人が一生の中に生む女子の數を計算して、英國に於て生れる女子の數は、生む母の數よりも少い事を指摘して英國の人口は近き將來に於て減少すべき事を科學的に證明し、一九三五年チャールス女史は英國の將來の人口の豫測を行つて、もし出產率が今日の調子で減退して行くならば――死亡率は國民の年齡構成の變遷と共に將來遞增すること必然なるが故に――英國の人口は今後百年經つと現時の十分の一になるであらうと發表して以來、英國の將來の人口減退と云ふ事は多くの學者の憂ふる所となつた。失業問題に關連してまだ多くの學者に依つて人口過剩說の唱へられて居る時に、失業問題の權威ベバリッヂは一九三七年、

「過去十七年間經濟學者の注意は銀行組織や金本位論に集中されて居たが、今後社會科學の中心は人口問題に移るであらう」と云つた。英國の、經濟及社會問題の興味の中心は失業問題や金融問題から、人口問題、殊に如何にして人口の減退を防止すべきかと云ふ問題に移りつゝある。

本書はこの問題を取扱つた一研究であるが、その研究の範圍を、死亡率の問題に集中し、其の材料を主として地方別死亡統計に依つて、貧困と云ふことが如何に死亡に影響するかと云ふ事を實證せんとしたものである。私は我國に於ても、差別死亡率の研究を行ひ度いと考へて居るもので、その研究方法に何か參考になることはないかと思つて、本書を讀んだのであるが、本書は主として英國に於ける地方別死亡率統計に據るものであつて、英國の如く勞働の移動少なく、大體勞働者の定住して居る所では、地方別死亡率はそのまゝその地方の衞生狀態を示すであらうが、我國の如く、勞働移動著しく、農村から都市工業に出稼に行つて病氣になれば鄉里に歸る、從つて、農村の死亡率は必ずしも農村の死亡原因をなすものに非ずして却つて工業都市の不衞生が、一部農村の死亡となつて現れると云ふが如き國に於ては、この英國式の地方別差別死亡率に依つて、その地方の衞生狀態、從つてその地方が代表する職業や、社會狀態(貧富等)の衞生狀態を示すものと見る事は出來ない。卽ちこの研究方法では日本にそのまゝ適用する事が出來ないが、英國に於ては或程度の實證的價値を失はないであらう。

著者は地方別差別死亡率を利用するために英國の死亡統計の分類に依り、英國を五地方に大別し、更に三十三區に細分し、その外に「標準地區」(Standard)を執へて、比較の基礎として居る。標準地區とは英國の南東地方より大ロンドンを除いたものである。卽ちベッドフォードシャー、バークシャー、バッキンガムシャー、エセックス、ハートフォードシャー、ケン

ト、ミッドルセックス、オックスフォードシャー、サザンプトン、サーレー、サセックス、及ワイト島を含み、富の程度高く衛生狀態の最も良好なる地方である。（五六頁）この地方を標準地方とし、貧困な失業者の多い工業地域がこの標準地區に比して如何に死亡率が高いかを示す事が本書の主たる內容である。

そこで本書は種々の角度より貧困地方と富裕地方標準地方との死亡率を比較するのであるが、その主たるものを紹介すると左の如くである。因に以下本文に於て英國とはイングランド及ウェールスを指し、スコットランド、北アイランドを含まない。

一　乳兒死亡率

乳兒死亡率は衛生狀態を示す最も標本的なものであるが、是を地方別に見ると頗る差の多い事に氣がつく、即ち左の如くである。

第一表　地方別乳兒死亡率（生產百に付）

Coulsdon Purley	三二	Glamorgan	六三
Surrey	四一	北部地方	六八
Home Counties	四二	Gelligaer（サウスウェールスの一都市）	七四
南東部全體	四七	Durham	七六
Middlesex	四八	Scotland	七七
大ロンドン	五一	Jarrow	一一四
Midlands	五九	Stockton-on-Tees	一三四
ウェールス	六三		

以上の地方の貧困程度に關する客觀的科學的の指數のない事はこの統計及本書全體を通じての缺點であるが、英國の實情を知るものには右の乳兒死亡率の順位が大體富の順序の逆になつて居る事が容易に氣がつく。著者は更に死因別に右の各地方の死亡率を分析して居るが、病氣の種類による差の分析と云ふよりは、種々の病氣につき、是を最良の地區迄向上することを得ば何人の生命を防ぎ得たるなるべしとの計算に忙しい。

病原別に各地方を比較したものを例示すると左の如くでその差の大なるに驚く。

第二表　主たる疾病別乳兒死亡率

	英國全體	標準地方	北部	北部(一)	ウェールス	ウェールス(一)
痲疹	一〇〇	一七	一八八	二一七	一五四	二〇八
百日咳	一〇〇	六一	一二九	一六三	一一三	一二一
結核	一〇〇	九三	九八	一二一	一〇五	九一
氣管支炎	一〇〇	五八	一三二	一四二	一一一	一一七
先天的弱質	一〇〇	八〇	一三五	一六三	一二四	一三七
痙攣	一〇〇	四八	一四七	二三二	二四八	二四一

北部やウェールスが英國全體に比し、更に南東部の所謂「標準」地方に比して遙に高き理由を、著者は失業、人口稠密、不況、救貧法の不完全等に依る母體及本人の榮養不良に歸して居る。（八六頁）その說明としてノルウェーのオスロに於て兒童の學校給食の結果死亡率の減少した事を擧げて居る。（同頁）

二　幼年者及少年者の死亡率

幼年者及少年者に就ても貧困地方は死亡率は高い。

第三表　幼年及少年の死亡率（一〇二、一〇三及一〇六頁）

	一歳より二歳未滿	二歳より五歳未滿	五歳より十五歳未滿
標準地方	一〇〇	一〇〇	一〇〇

大ロンドン	一四九	一三七	—
北　部(一)	二六二	二一二	一五七
ウェールス(一)	一八四	一七二	一三七

備考　一歳より二歳未滿、二歳より五歳未滿は一九三一年乃至一九三四年、五歳より十五歳迄は一九三一年乃至一九三五年平均

三　出産に基く死亡

地方別の死亡率は出産に基く死亡率に就ても同樣の傾向を示す。

第四表　出産に基く死亡率（一四四頁）

出産（死産を含む）千當りの死亡

ウェールス(一)	五・二九	大ロンドンの內譯	
ウェールス	五・一七	バーモンヂ・ー	五・〇四
北　部(一)	四・七八	パドイントン	五・〇二
北　部	四・三六	ウェストミンスター	一・八一
南　東　部	二・五七	ケンシントン	〇・八六
大ロンドン	二・一六		

右の表に就ても各地區の貧富の程度を表はすべき數字はないが、英國の事情を知るものは右の全國的區分及ロンドンの區分が正に住民の貧富程度をはつきり現はし、出産に基く死亡率の少ない地方が卽ち富民地區に該當することは容易に理解し得らるゝのである。

四　結　核

そ結核死亡依率のでつてが貧富にが貧民　病甚しく異なることは各國共通の事實であるが英國の統計も亦明白にこの事を示す。

第五表　婦人の結核死亡率（一七〇頁）

一九三一年乃至一九三五年英國全體の平均を百とす

	十五歳乃至三十五歳	三十五歳以上
大ロンドン	九〇	九七
サーレー州都市	六八	七一
同上　田　舍	五八	七九
ニューカッスル	一三九	一二七
ダラム州都市	一三六	一二二
同上　田　舍	一一七	一〇五
ノーザンパーランド州都市	一二七	一〇六
同上　田　舍	八一	一二七
カヂフ	一三六	一三三
グラモルガン州都市	一七七	一三〇
同上　田　舍	一四三	九四
モンマスシャー州都市	一六三	一〇四
同上　田　舍	一一二	八三

右の表に於て結核死亡率の高い地方は低賃銀、長期失業、貧困の甚しき地方であつて、衞生省が結核は榮養不良と密接の關係があると云つた事を實證するものとして居る。

尙貧困と結核との關係に關して E.F.Wyne がシェフィールドに於て調査した結果一室に二人以上の割合で住んで居る人々の結核死亡率は一室に一人未滿なる家の人々の夫に比して二倍以上なりしこと。A.S.MacNalty 卿が一九二九年大都市の調査の結果、一家一室の人々の結核死亡率は千人當り四・四三人なるに反し、一家五室以上を有する人々の結核死亡率は千人

當一、三二人なること、F.C.S.Bradbury がヤラウに於て千三百の家族に就て之を家族の收入一人當り十志未滿の家と、十志以上の家とに就て結核患者の居る家の率を調査した結果、前者に於ては五十五%、後者に於ては三十五%であつたこと、ブレイドンに於て同様の調査をなしたるに前者では三十四%、後者では十八%であつたこと等を引用して貧困が結核の重要原因なる事を證明して居る。

同様の事例は尙本書に多數擧げられて居るが、この邊で打切つて本書に對する批判を一言するならば、第一に前に屢々言つた如く、本書は地方別の死亡率比較に依つて直ちに貧富の死亡率に及した影響とするのであるが、各地方の貧富を現はす客觀的數字的標準を示して、貧困指數と死亡率との關係を示すならばもつと效果的であつたであらうと思はれる。第二に本書に於て各種死亡率の最も高い所とされたダラムは出産率一番高く、再生産率に於て英國中最高であると云ふ事である。そして逆に死亡率の一番低い所として擧げられたサーレーは出産率最も低く再生産率最も低いと云ふ事である。唯人道的醫學的見地より死亡率の低き事を以つて最終目的とするならば卽ち廢む、然らずして人口論的見地よりするならば如何に死亡率が少くとも同時に出産率も少いのでは何にもならない。この間の因果關係をはつきりする必要がある。第三に死亡率の高い地方は大體勞働者街で死亡率の最も低い所は有閑富裕階級の住宅街又は別莊地で、英國が産業を止めて外國投資の利子で別莊生活をする事を以つて理想とするのでない以上、地方別の死亡率の差の大なる事を示されても如何とも出來るものではない。唯最後に擧げた、室數と結核死亡率、賃銀收入別の結核患者別は直ちに以つて國策の基礎たるを得る樣に思はれる。（北岡壽逸）

マーシャル著「人口問題に關する英國民衆の考へ」

Marshall, T. H. and Others. The Population Problem: The Experts and the Public. George Allen & Unwin, Ltd., London, 1938.

本書は一九三七年の春英國に於て「世代が移り變る毎に」と題し問答體で數回に亘り人口問題に關して專門家諸氏が放送せるものを翌年論文體に改めて發行されたもので、一般國民を對照とした人口問題の解說的普及版である。その目次は、人々はどう考へてゐるか(T.H.Marshall)、英國の實情(A.M.Carr-Saunders)、經濟的意義(H. D. Henderson)、世界の人口(R. R. Kuczynski)、人口の趨勢と國際移民(Arnold Plant)、原因とその對策(H.D.Henderson)、結論(T.H.Marshall)、よりなつてゐる。これらの項目の內容に關しては既に他の機會に我國に屢々紹介されてゐるもので再言を要しないので、こゝでは單にその第一、二章をなしてゐる人口問題を「人々はどう考へてゐるか」に就てその概要を紹介して見たいと思ふ。

前篇　四代表者の聲

英國放送協會は人口問題に關する專門家の放送に先立ち四名の一般人民代表者に依賴してその意見を討議せしめた結果左の如き興味ある回答を得た。

四名の代表者とは倫敦郊外の一事務員、ヨークシャイアの姉妹である女